あなたのアートを誰に見せますか？

WHO WILL YOU SHOW YOUR ART TO ?

Installation view from *When the body says Yes* for the 59th Venice Biennale in 2022
Photo by Peter Tijhuis, Courtesy of the artist and AKINCI

青山悟 Satoru Aoyama
アンドレア・バウアーズ＆スザンヌ・レイシー Andrea Bowers & Suzanne Lacy
メラニー・ボナーヨ melanie bonajo
小林正人 Masato Kobayashi
リー・ムユン Muyun Li
岡田夏旺 Kao Okada
パク・サンヒョン Sanghyun Park
海野林太郎 Rintaro Unno

キュレーター‖荒木夏実［東京藝術大学准教授］
Curator: Natsumi Araki (Associate Professor, Tokyo University of the Arts)
共同企画者‖青山悟［アーティスト］
Co-Planner: Satoru Aoyama (Artist)
展示監督‖岩間賢［東京藝術大学准教授］
Exhibition Manager: Satoshi Iwama (Associate Professor, Tokyo University of the Arts)

2023年8月8日〈火〉――8月27日〈日〉

Tue. August 8 —— Sun. August 27, 2023

10:00-17:00　月曜休館 Closed on Mondays　入場無料 Admission Free

東京藝術大学大学美術館 陳列館

Chinretsukan Gallery, The University Art Museum, Tokyo University of the Arts
〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8　12-8 Ueno Park, Taito-ku, Tokyo, 110-8714
ハローダイヤル Hello Dial : 050-5541-8600

関連イベント｜アーティスト・トーク「そこに愛はあるのか？」
登壇者｜青山悟／小林正人　**モデレーター**｜荒木夏実　**日時**｜2023年8月20日〈日〉14:00-15:30 ※予約不要　**会場**｜東京藝術大学上野校地 絵画棟1Fアートスペース

主催‖「アートと社会」実行委員会　**助成**‖公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京［東京芸術文化創造発信助成］　公益財団法人全国税理士共栄会文化財団　公益財団法人野村財団　公益財団法人朝日新聞文化財団　公益財団法人花王芸術・科学財団　**後援**‖駐日オランダ王国大使館

who.oh-mame.com　ARTS COUNCIL TOKYO　NOMURA 野村財団　公益財団法人 花王 芸術・科学財団　Kingdom of the Netherlands

展覧会企画

あなたのアートを誰に見せますか？

WHO WILL YOU SHOW YOUR ART TO ?

基本情報

会期 ‖ 2023年8月8日〈火〉— 8月27日〈日〉

開館時間 ‖ 10:00-17:00

休館日 ‖ 月曜休館

入場料 ‖ 入場無料

会場 ‖ 東京藝術大学大学美術館陳列館
〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8
ハローダイヤル：050-5541-8600

参加作家 ‖ 青山 悟
アンドレア・バウアーズ & スザンヌ・レイシー
メラニー・ボナーヨ
小林 正人
リー・ムユン
岡田 夏旺
パク・サンヒョン
海野 林太郎

キュレーター ‖ 荒木夏実［東京藝術大学准教授］

共同企画者 ‖ 青山悟［アーティスト］

展示監督 ‖ 岩間賢［東京藝術大学准教授］

コーディネーター ‖ パク・サンヒョン

主催 ‖ 「アートと社会」実行委員会

助成 ‖ 公益財団法人東京都歴史文化財団
アーツカウンシル東京［東京芸術文化創造発信助成］
公益財団法人全国税理士共栄会文化財団
公益財団法人野村財団
公益財団法人朝日新聞文化財団
公益財団法人花王芸術・科学財団

後援 ‖ 駐日オランダ王国大使館

ARTS COUNCIL TOKYO　NOMURA 野村財団　公益財団法人 花王 芸術・科学財団　Kingdom of the Netherlands

お問い合わせ

作品画像をご入用のプレス関係者の方は、媒体名とお名前、連絡先をご記入の上以下までお問い合わせください。

whoanatanoart@gmail.com

ウェブサイト

http://who.oh-mame.com/

展覧会概要

アーティストと鑑賞者が共に作る展覧会

本企画は社会の様々な問題に向き合うアーティストの作品を通して、孤独、身体とセクシャリティ、人間と自然の関係、他者との協働や連帯など、さまざまな今日的問題について考える展覧会です。さらに、鑑賞者あるいは「オーディエンス」の存在に注目し、アーティストとそれを見る人との相互関係と鑑賞体験の新たな可能性を探ります。
アーティストでアクティビストであるスザンヌ・レイシーは、自分の作品を美術館で見せる際に、それを見に来る人だけでなく、経済的·精神的制約などのために美術館に来ることのできない人のことも想像すると語っています。
作品はアーティストだけで成り立つものではなく、それを見て様々なことを感じ、解釈し、時に疑問を抱くオーディエンスの反応によってその意味は変化し続けます。それゆえに作品は時代や地域を超えて鑑賞され、新たな読み取り方を可能にする自由を獲得するともいえるでしょう。
本展ではアーティストが提示する多様な視点を紹介しつつ、オーディエンスの意見も展示の中で視覚化します。アーティストと見る人の思考が交錯する空間で、作品との新たな対話が生まれることを期待しています。

本展の特徴

アーティストとオーディエンスのメッセージを視覚化

アーティストと鑑賞者をつなぐ試みとして、アーティストへの問い（誰に作品を見てもらいたいか、制作の時に考えたことは何か、見る人にどんなメッセージや質問を送りたいか）と答えを会場に掲示するとともに、鑑賞者の意見（どの作品が好きか、そのアーティストに伝えたいことは何か、誰にこの展覧会を紹介したいか）を書いてもらうシートを用意し、それを壁に貼り出して後から来た人が見ることができる仕組みを作ります。他者の作品への意見を知ることによって、よりオープンな鑑賞体験が可能になります。

多様なオーディエンスとの対話

普段美術館にアクセスしにくい鑑賞者にも声をかけて、作品について語り合う機会を作り、さまざまな意見を聞きます。ろう者のグループとの手話を通じたトークやディスカッション、幼児対象に作品を見て感想を聞くプログラム、シニアのオーディエンスとのプログラムなどを予定しています。そのレポートをホームページに掲載していきます。

制作を通した協働と連帯

コロナ禍で人々が交流を制限された時期に、スザンヌ・レイシーはアンドレア・バウアーズとともに本展出品作の映像作品を制作しました。エコ・フェミニストとして有名なスーザン・グリフィンの1978年の著書『女性と自然：彼女の内なる咆哮』（Women and Nature: The Roaring Inside Her）の中の詩「この地球：私にとっての彼女の存在」（This Earth: What She Is To Me）を女性たちが一節ずつ朗読する様子をビデオに収めたものです。モニカ・メイヤーやキャサリン・オピーなどの著名なアーティストとともに、原作者のグリフィン自身も登場しています。世代を超えた女性の連帯を示す作品です。
2022年にベネツィア・ビエンナーレのオランダ館を代表したメラニー・ボナーヨの《When the body says Yes》では、ワークショップを通して人々が互いの身体に触れ合い、身体に関する悩みや違和感、文化と身体の関係などについて語っています。
青山悟は、東京のインターナショナルスクールでのワークショップで制作した子供たちによるマスクの作品を自作とともに展示します。

小林正人は「LOVEゼミ」と呼ばれる東京藝術大学の授業で「好きな人に届ける作品を作る」というミッションを学生に与え、渡すところまでを作品とする企画を行いました。参加学生の作品とともに自作を展示します。
岡田夏旺は、ホテルの清掃のアルバイト先で高齢のスタッフや海外から日本に働きに来た人たちと出会い、それぞれの仕事や人生への思いに接してきました。同僚と協働しながら作り上げていく「清掃作品」を映像インスタレーションとして提示します。

オータナティブな視点

リー・ムユンは日本に住む中国人として、違和感や疎外感に遭遇する自身の体験を元に、人間誰もがもつ孤独や卑屈さをユーモアを交えて映像やラジオドラマの形式で表現してきました。
アーティストでアクティビスト、性科学ボディワーカーであるメラニー・ボナーヨは、男女のペアや婚姻や、家族というシステムを超えた、身体を通じた関係性を、クィアの視点から探求しています。
パク・サンヒョンもまた、クィアであり日本に住む外国人という自身の異邦人としてのアイデンティティを見つめながら、伝統的な男性性から脱却する彫刻の可能性を探り続けています。
海野林太郎は、人と動物、自然と人工物、現実と虚構の枠組を解体しながら、ありうるかもしれない世界のナラティブを描きます。

アーティスト・トーク

「そこに愛はあるのか？」

本展出品作家の青山悟と小林正人を招き、制作におけるオーディエンスへの愛や想い、学生や子どもたちとのコラボレーションなどについて話を聞きます。

日時 ‖ 2023年8月20日〈日〉 14:00-15:30 ※予約不要
登壇者 ‖ 青山悟、小林正人（アーティスト）
モデレーター ‖ 荒木夏実（東京藝術大学准教授）
会場 ‖ 東京藝術大学 絵画棟1Fアートスペース
〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8

参加作家プロフィール・作品

青山 悟 Satoru Aoyama

1973年東京都生まれ。工業用ミシンを用いて刺繍というメディアの枠を拡張させる作品を発表。コロナ禍において自宅から新作を公開・販売するウェブサイト「Everyday Art Market」を立ち上げ、顧客とのコミュニケーションを重視した制作活動を行った。本展ではブリティッシュスクールの生徒と行ったワークショップの作品も展示。

青山悟《N氏の吸い殻》2023

アンドレア・バウアーズ＆スザンヌ・レイシー
Andrea Bowers & Suzanne Lacy

1964年アメリカ・オハイオ州生まれのバウアーズは、活動家の記録を撮り続け、ジェンダーや環境、移民の正義のために戦う人々の経験を作品化する。1945年アメリカ・カリフォルニア州生まれのスザンヌ・レイシーは、ソーシャリー・エンゲージド・アートの先駆者として人種差別や貧困などの社会問題にコミュニティと協働して取り組む。本展出品作は、2 人による共作。

アンドレア・バウアーズ＆スザンヌ・レイシー《この地球:私にとっての彼女の存在》2020
Courtesy of Andrea Bowers and Suzanne Lacy

メラニー・ボナーヨ
melanie bonajo

1978年オランダ・ヘールレン生まれ。アーティスト、映像作家、性科学ボディワーカー、活動家。クィアと脱資本主義的視点から、セクシャリティや親密さ、感覚を取り戻し、共有する可能性を探る。2022年ベネツィア・ビエンナーレのオランダ館を代表。

メラニー・ボナーヨ《When the body says Yes》2022
Courtesy of the artist and AKINCI
Still made by Sydney Raheemtoola

小林 正人 Masato Kobayashi

1957年東京都生まれ。1996 年サンパウロビエンナーレ日本代表。1997年にキュレーターのヤン・フートに招かれ渡欧し、ベルギーのゲント市を拠点に各地で現地制作を行う。2006 年帰国。「絵は画家の世界との向き合い方そのもの」と述べる小林は、教鞭を執る東京藝術大学の授業で「一番好きな誰か、見せたい人の方を向いて描くことの大切さ」を力説する。本展では「LOVEゼミ」参加学生の作品も展示。

小林正人《画家の肖像》2019
Copyright the artist, Courtesy of ShugoArts, Photo by Muto Shigeo

リー・ムユン Muyun Li

2000年中国上海生まれ。東京藝術大学美術研究科修士課程在籍。映像やラジオドラマなどのタイムベースド・メディアを用いて独自のナラティブを表現する。自らの経験に基づいて、人の内面にある卑屈さや疎外感、孤独を描き、それらを他者と共有できるような作品作りを試みる。

リー・ムユン《モノローグ》2021

岡田 夏旺 Kao Okada

2001年東京都生まれ。東京藝術大学美術研究科修士課程で学びつつ、ホテルの客室清掃員のアルバイトを心から楽しむ。年代や出身国が異なる清掃員仲間との交流から得た経験や、清潔さと汚れの境界に関する考察を、映像インスタレーションによって表現する。

岡田夏旺《Clean/ing people》2023

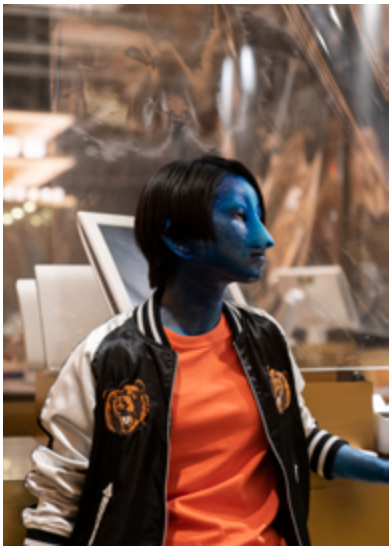
パク・サンヒョン Sanghyun Park

1991年韓国ソウル生まれ。日本に暮らす異邦人であり、クィア当事者である自身の置かれた状況を、彫刻的アプローチを通して考察し、彫刻の持つ男性性の解体を試みる。自身のアイデンティティを疑ったことのある人や、人間の営みの根源的性質に関心をもつ人に作品を見せることを想定して制作を行っている。

パク・サンヒョン《粗末に構成された彫刻 — 16時31分》2021
※参考作品

海野 林太郎 Rintaro Unno

1992年東京都生まれ。宗教やテレビゲームなど、自身が身近に感じてきたものを手がかりに、映像や写真、彫刻などを通して目に見えない多様な存在を可視化する。異なるモノや価値観が共存する場の可能性について、詩情やユーモアを交えて考察する。



海野林太郎《マヌケだね 楽しい夜さ 好きだよ》2022